

# 評価グリッド法について

1999.8.28  
土田 義郎

評価グリッド法というのは、人間が何を知覚してその結果どのような評価を下しているのかという認知構造を同定するための方法です。手続きとしては、いくつかの評価対象を提示し、その対象に対する好ましさを被験者がまず判定します。好ましさのランクの異なる対象同士について、その理由を実験者が被験者に対しラダーリングしてゆくことで全体的認知構造を効率的に引き出させる手法のことです。

この手法は、心理学の分野で行われていたレポーター・グリッド手法という方法を、より効率的に適用するために建築の景観評価の分野で発展させた方法で、最近環境心理的分野に多く使われています。

ラダーリングはラダーアップとラダーダウンからなります。ラダーアップとは、被験者の根源的心理状態に近づけてゆくための質問であり、ラダーダウンとは対象の具体的状態を定めてゆくための質問です。

例をひいて説明しますと、A という椅子と B という椅子を比べた場合に「A の方が背もたれが大きいから好き」という評価が現れたとします。これをラダーアップするには「背もたれが大きいとなぜよいと感じるのですか。」と聞き、「疲れないから」というような、より抽象性の高い表現へと導いてゆくのです。

逆にラダーダウンとは「A の方が疲れなさそうだから」という評価が現れた時に「疲れなさいための条件はの場合なんですか」と聞き、「リクライニングできる」「クッションが適度な硬さ」といった具合に、より具体性の高い表現へと導いてやることです。

この手順を繰り返すことで認知構造全体を「定性的に同定」するのが評価グリッド法ということになります。もちろんこれは人間が知覚する一面だけの評価であり、具体的な椅子の設計にいたるには別の面からさらに定量的な検討をすることが必要です。

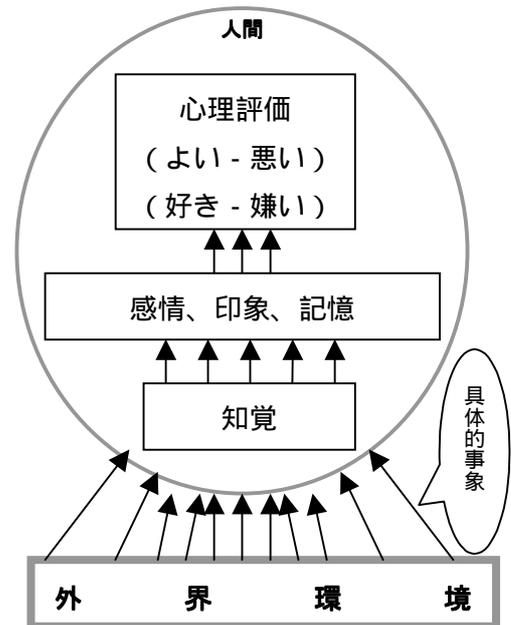


図1 認知構造のモデル

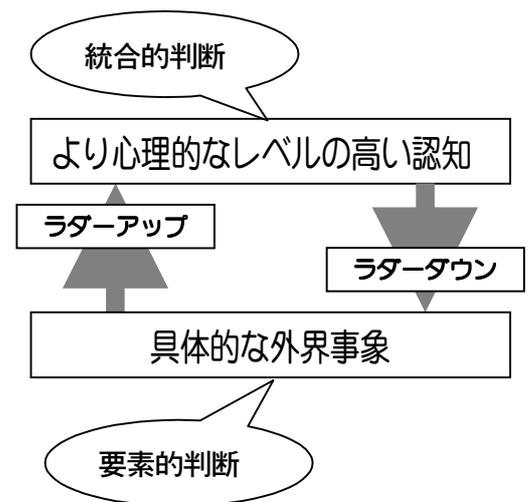


図2 ラダーリング



椅子A 椅子B  
図3 椅子の評価のラダーリング